
デンジャラスwitch？

K-15

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デンジヤラスwitch？

【Nコード】

N4969X

【作者名】

K-15

【あらすじ】

第五次聖杯戦争、魔術師である遠坂凜は所有者のどんな願いも叶える聖杯を手に入れる為長い期間を掛け今宵シモベであるサーヴァントを召喚する為の儀式を行う。

絶対の自信を持ってセイバーを召喚するはずが・・・

CHAPTER 1 今日も私はクライマックス（前書き）

作者が書いている別の小説もあり更新はかなり遅くなります。
フェイトもあまり詳しくないのでいろいろな資料と睨めっこしながら書いています。

間違った設定があつたら報告してください。

CHAPTER 1 今日も私はクライマックス

準備は完璧、道具も揃えたし魔方阵も一寸の狂いもなく正確に書いた。

日付、時間、場所、すべて正しく進んでいる。

後は唱えるだけ！

って彼女は思ってるらしいけど本当に大丈夫？

「告げる、汝の身は我が元に。我が運命は汝の剣に。聖杯の掟に従い、この意、この理に従うのなら答えよ。」

地面に書いた大きな魔方阵が赤く発光する、彼女はその中心でサーヴァントを召喚する呪文を本を片手に唱えている。

私は赤より黒のほうが好きね。

「誓いをここに、我は常世全ての善となる者、我は常世全ての悪を如く者。汝、三代の言霊を纏う善くしの輪より来たれ。」

何だか難しい事言っちゃって、そんなのよりガガの新曲でも流してよ。

それがダメなら私が聖書を読んであげる。

「天秤の守り手よ！」

召喚の呪文が終わった。

「アレ・・・何もない・・・？」

呪文は読み終えたのにサーヴァントは召喚されず何も変化は無い。

「何で！？ミスは無いはずなのに！」

すると左手にマスターの証である令呪が刻まれる。

ソレを見て安堵する凜、だが一向にサーヴァントは現れない。

さっきまでの冷静な彼女とは違い心底慌てているのが見て分かる。

二階から大きな爆発が起こった。

爆発の衝撃に家は揺れ天井から埃が落ちてくる。

凜はすぐさま爆発のあった二階の部屋に走った。

階段を駆け上がり息も整えぬまま扉を開けた。

そんなに慌てなくても私は逃げないわよ。

「くっ!？」

部屋には埃が充満しており満足に前も見えない。

あまりの煙たさに腕で鼻と口を塞ぎ少しでも呼吸を楽しむ。

その中に居るのは・・・

「こんな時間に、一体どんな神経をしてるの？」

全身を黒いスーツに身を包んだ長身、長髪の女がそこに居た。

ソファーに腰をかけ足を組み凜の姿をまじまじと見ている。

「アンタ・・・もしかしてサーヴァント!？」

召喚に成功して喜ぶ凜、だが・・・

「それより私のブローチしらない?どこかに落としちゃったのよ。」

「クラスは・・・!もちろんセイバーよね？」

サーヴァントは右手の人差し指をそつと凜の顔の前に出した。

指をゆっくりと左右に揺らす。

「チツ、チツ、チツ」

ソファーからゆっくり立ち上がる、ハイヒール独特のカツカツと鳴

る音を立てて凜の目の前に立った。

「ありがと。」

「え・・・?」

腕を凜の髪の毛に伸ばすと三日月の形をしたブローチを取った。

「いつの間に・・・」

「それで、子猫ちゃんが私に何の様？」

「何って、聖杯戦争に勝って聖杯を手に入れるのよ!その為に私は

アナタを召喚したのよ!」

「戦争だなんて物騒ねえ、レディならもつと御しとやかにしないと

ね。」

サーヴァントは凜の頬をやさしく撫でた。

真面目に話を聞かない事に段々と我慢が出来なくなってくる。

「それでアナタのクラスと真名は？」

「クラス・・・?ハイスクールではずっとだったわ。」

「冗談は止めて、真名は？」

「ヒ・ミ・ツ 女は謎があるほど美しくなるものよ。勉強になったわね子猫ちゃん。」

ついには我慢の限界が来ようとしていた。

「いいからクラスを言いなさい！」

「そんなに怒って、若い内はからそんなんじゃシワが増えちゃうわよ？」

我慢出来なかった・・・

凜の左手の令呪が眩しく光り視界が見えなくなる。

「答えなさい、アナタのクラスと真名を！」

貴重な令呪がこれで一つ消えてしまう。

「・・・」

「・・・」

沈黙した重い空気が漂う。

その中でサーヴァントが発した第一声は・・・

「チュッパチャップスのストロベリー味。」

「はぁ・・・？」

「私ストロベリー味が一番好きなの。置いてない？」

せっかく令呪を使ったのにサーヴァントが言う事を聞かない。

全身に冷や汗が流れる。

理解出来ない、何故？何？どうして？

「どうしたのそんな顔して？・・・あゝあ、さっき言ってたクラスと真名ね！」

「そっそう！そうよ、答えなさい。」

「でもクラスって何なの？さっきも言ったけどハイスクールではずつとこだったわよ？」

「どう言う事？自分のクラスを知らないの？」

「だからさだって言ってるじゃない、さっきからずっと。」

サーヴァントが自分のクラスを知らない？

ありえない、こんな事聞いた事がない。

想定外の事態にどうしたらいいのかわからない。

だが目の前のサーヴァントは人を小馬鹿にした態度を崩さない。

「でも名前なら知っている。聞かせてあげるわ。」

そつだ、誰もが知っている偉大な英霊ならその過去の歴史からクラスが分かるかもしれない。

一途な願いを込めながら心の中で祈る。

「いい、よく聞きなさい！私の名前は・・・」

さっきまで絶望のどん底に居るかのような凜の顔色が良くなっていく。

このサーヴァントの真名に胸を躍らせる。

そう、彼女の名は・・・！

「ベヨネッタ！」

CHAPTER 1 今日も私はクライマックス（後書き）

感想お待ちしております。

CHAPTER 2 前菜なんて知らない（前書き）

久々の更新、フェイトは設定とかあまりわかりません。
アドバイスをくれるとうれしいです。

ゲームやりながら書こうと思ったらソフトが見つからない・・・
どこいったんだろう・・・

CHAPTER 2 前菜なんて知らない

べよねった・・・ベヨネッタ・・・BAYONETTA・・・
知らない、聞いたこともない、見た事もない!!!

学業には自身のある方だがベヨネッタなんて名前の英霊なんて聞いたこともない！

「ベヨネッタなんて名前、初めて聞くんだけど・・・」

「でしょうね。」

「！？でしょうねってアンタ・・・!」

「それよりもアナタの名前は？」

「私の・・・？」

「そうよ、いつまでも子猫ちゃんって呼ばれたいの？私はそれでもいいけれど。」

相変わらず人の事を馬鹿にするようなしゃべり方、まあここは我慢ガマン・・・

「私は遠坂凜、ここの屋敷の主であり、アナタのマスターよ。」

「ん、遠坂凜、覚えたわ子猫ちゃん」

また子猫ちゃんって言った！

「それで、これから何をするの？」

ベヨネッタの声を聞き沸騰する頭の中を強引に冷ます。

「アナタはこれから私と一緒に聖杯を手に入れる為に他のマスターとサーヴァントと戦ってもらうわ。」

「へ、それから？」

「マスターは私を含めて7人、その中で生き残ったものだけが聖杯を手に入れられる。」

「って事は相手は6人・・・簡単じゃない。」

「この戦いに勝つのはそんな生易しい事じゃないわ。アナタのクラスが分からないから何とも言えないけど、相手がセイバーやバーサーカーなら相当な苦戦を強いられるわ。」

「・・・ふん。」

「ふんって!？」

「ならさっそく行きましょう、私、待つのは嫌なの。」

「行かつて何処へ・・・」

嫌な予感しかない。

出会ってわずかな時間しか経っていないがろくでもない事を言う気がする。

「何処って・・・? 決まってるじゃない、手始めにそのバーサーカーってヤツに会いに行くわよ。」

「無茶よ! バーサーカーはサーヴァントの中でも最強って呼ばれるのよ! セイバーでもなきやまともに太刀打ちできないわ!」

「〜」

出た、この余裕の笑みは何処からやってくるのだろう。

「なら私がそのセイバーなんでしょ。軽くひねってあげる。」

彼女はそう言うのと黒い長髪を揺らし2階の部屋から立ち去っていく。何なの、一体・・・よりもよってあんなのを召喚するだなんて・・・

私の今までの血のにじむような苦勞が・・・

「ちよつと!!!」

「!?!」

びっ!?! びっくりした、今度は何よ・・・!

「外ってどうやって出るの。この家広すぎるのよ。」

「はっ分かった、私も付いて行く。でも、必ず私の指示には従って、いいわね!」

2人は屋敷から出て誰も居ない道路に立つ。

でも会いに行くと行って何処にいるのか分かるのかしら?

「で、どう動くの? 闇雲に動いても相手に悟られるだけ。」

「決まってるわ、真正面から一点突破よ。」

「私の話を聞いていなかったの? バーサーカーは最強、普通に戦っ

ては勝てない。」

「大丈夫よ、私セイバーなんですよ？」

そう言うところの凛の体を抱きかかえた。

「さっさとしないと日が昇るわ。しっかり掴まってなさい！」

ベヨネッタの人間離れた跳躍で2人は空に舞う。

一瞬にしてベヨネッタは影へと消えた。

ベヨネッタが付いた場所は町はずれにある森、不気味に月の光が輝いている。

「本当にここにバーサーカーが居るの？」

「私の勘を信じなさい。」

「勘でここに来たの？」

「大丈夫、女の勘は良く当たるものよ。」

信じられない、勘で動くだなんて。

私の召喚、一体何処で何を間違ったのよ!!!

心の中で叫んでいる間にもベヨネッタは先へと進んでいく。

「ちよつと!?!待ちなさい！」

凛はベヨネッタの後を急いで付いて行つた。

辺り一面木しか生えていない。

こんな所にバーサーカーが居るのかしら？

不安に苛まれながらも奥へと進んでいく。

すると大きな城が眼前に立ちふさがっていた。

丁寧に門まで作ってある。

「ほくら着いた。いかにもって感じじゃない、ココ。」

もしかしたらバーサーカーと戦うかもしれないのに全然緊張感が無いわね・・・

どんな神経してんのよ・・・

「凛、来たわよ。」

「!?!」

城の奥からとてつもない魔力量がコチラに向かって来る。

凜はすばやく頭を回転させどのように戦うか考える。

「間違いない！この魔力量はサーヴァント！！」

「子猫ちゃんはココに居なさい。」

「無茶よ！ここは作戦を考えないと、それにアレは本当にバーサーカーかも知れない。異常よ、こんな魔力！」

「そんなに私って信用されてないの？まあいいわ、黙って見てなさい！！！」

凜に勝手に言い残すとベヨネッタは飛んだ。

その両手足には彼女の愛用している武器スカボロウ・フェアが装備されていた。

CHAPTER 2 前菜なんていない（後書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。

CHAPTER 3 泣きっ面にムチ！（前書き）

ベヨネット強くしすぎたかな？

フェイトに詳しい人、ご意見お待ちしております。

CHAPTER 3 泣きっ面にムチ！

ベヨネッタはまた私の言う事を聞かずに飛び出して行った。あの強大な魔力量を前にしても余裕の笑みを浮かべていた。どれだけ自身があるかは知らないが一人でなんて無謀すぎる。

「待ちなさい、ベヨネッタ！」

人の言う事も聞かないで勝手に走っちゃうんだから！でも今から走って戦いを止めれるかしら？とにかく急がないと！！！

あの子、何を言っているのかしら？まあ後で聞けばいいか。

それよりも、さっそくメインディッシュを頂くとしましょう。奥に居るあのビックダディをね

「さあ、相手をしてあげる。出ていらつしゃい。」

ベヨネッタが声を発すると城の奥から巨大な人影が現れた。

身長は軽く2メートルを超えている。

右手には巨大な岩の剣が握られている。

「初めからクライマックスで行くわよ！」

ベヨネッタは跳躍すると両手に握ったスカボロウ・フェアを連射する。

魔力の籠もった銃弾は普通の弾とは違った一発でもとてつもない破壊力を持っている。

それが全弾、バーサーカーの頭部に命中した。

さらにその頭部へ急降下し強烈なキックを突き刺す。

足が当たった衝撃で周囲の空気が振動する。

「ふーん、あの忌々しい天使とは違うつて訳ね。」

スカボロウ・フェアの弾は分厚い皮膚に傷ひとつ付いておらずキックを受けても微動だにしない。

「ガアアアアアアアッ！！！！」

巨人の左手がベヨネッタの足を掴みとる。

彼女をまるで虫を払うように無造作に投げ飛ばす。

腕を振っただけでも物凄い風速の風が起こる。

投げられたベヨネッタだが空中で一回転すると綺麗な姿勢で地面に着地した。

「そうでなくっちゃ、面白くないわ。」

巨人のパワーを目の当たりにしても彼女は余裕の笑みを浮かべていた。

「ハッ！」

するともう一度巨人目掛け走り出した。

彼女のスピードは常人では捕らえる事は難しい筈なのに巨人はそれに反応した。

右手に持った岩の剣を大きく振りかぶり真っ直ぐに向かって来るベヨネッタに振りかぶる。

「ガアアアアアアアッ！！！！」

振り落とされた剣は周囲に衝撃波を伝えながら地面をえぐった。

まるで地震が起こったような振動が起こる。

えぐれた地面からは土煙が舞い視界が悪くなってしまう。

時間にして数秒、しだいに良くなる視界にはえぐれた地面だけでベヨネッタの姿は無かった。

「私の足に触った事は許してあげる。ただし・・・」

その声は横から聞こえた。目の前に居たはずのベヨネッタは巨人の左肩に腰を掛けて座っていた。

「お仕置きは受けてもらうわ。」

巨人のこめかみにスカボロウ・フェアをぶち込んだ。

弾は防がれてしまうが衝撃で頭が右に傾く。

足を踏ん張り姿勢を保つともうそこに彼女は居なかった。

巨人の体にベヨネッタの連撃が繰り返される。

まずは右足、膝の裏へスカボロウ・フェアを連射した。

またダメージは通らないが一瞬にして30発以上の弾が放たれ姿勢が前へと傾いてしまう。

次は背中、ベヨネッタの蹴りが炸裂し体が倒れ始めてしまう。もう持ち直す事は出来ない。

「オマケよ！」

ダメ押しでウイケッドウィーブで魔人の足を召喚し頭部を踏みつけた。

音をたて巨人は地面へ倒れウイケッドウィーブで尚も頭部を踏みつけられる。

「ベヨネッタ！！！」

振り向くと後ろにはあの子が居た。

「あら、子猫ちゃん。そんなに慌ててどうしたの？」

「アンタが勝手に行くからでしょ！それよりも・・・」

「ああ、こんなの余裕よ。」

「！？ベヨネッタ、後ろ！」

ウイケッドウィーブを持ち前のパワーで振りほどくと岩の剣をベヨネッタに振りかぶった。

あとわずかで彼女の体に剣でぐちゃぐちゃにされてしまう。

だが彼女は振り向くと華麗にバク転する。

すると周囲の時間がスローモーションになる。

ベヨネッタが持つ超常力、ウィッチタイムが発動した。

無防備の巨人の目にベヨネッタは両手のスカボロウ・フェアを放った。

その連射は通常時よりもさらに早くなりマシンガンを撃つよりも早い。

その弾は一寸の狂いもなくすべて巨人の右目に当たった。弾は皮膚を突き破り右目が潰れ出血してしまう。

「がああああアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

「何？どうなってるの・・・？」

「しっ！動いちゃダメよ。」

痛みに苦しむ巨人を睨み付ける、すると彼女のボディースーツが生きているかのように動き始めた。

「来なさいゴモラ！！！」

ボディースーツが体から剥がれ一箇所伸びていく。

長く伸びたスーツが束になるとそれは黒い竜へと変化した。

目は赤く鋭い牙が獲物を狙っている。

「アレは一体・・・！？」

ゴモラと言われた黒い竜は巨人に狙いを付けた。

「グギヤアアアアア！！！」

雄たけびを上げ巨人を頭から飲み込もうとする。

鋭い牙を立て肉を喰いちぎる。

だがその大きな口を寸前の所で顎を掴み喰われまいと逃げようとする。

「ググググググッ！！！」

巨人と竜の力比べ、何とか今は耐えているがもう持たないだろう。

「ガガアアアアアアアッ！！！」

黒い竜の力が勝った。

巨人の太い腕も意図も容易くあらぬ方向へへし折られてしまう。

そして竜の牙が胴体を捉え喰いちぎられた。

喰われて半分になった下半身から大量の血が噴出す。

その血を浴びると黒い竜はベヨネッタのボディースーツへ戻っていた。

「強い・・・」

あの化物じみた魔力を持ったサーヴァントを倒した。

彼女の自身は本物、これならどんなヤツにも負けない！

「すごいじゃないベヨネッタ！これなら聖杯を手に入れられるわ！」

「当たり前よ、この私があんなのに負けるはずないでしょ。アナタもそう思うわよね！」

巨人の近くにはいつの間にか人が居た。

背は低く少女のようだった。

「すごいわね、バーサーカーを倒しちゃうなんて。」

「もつと褒めてくれてもいいわよ。」

「でも残念、バーサーカーはまだ死んでないわ。」

巨人、バーサーカーの喰いちぎられ残った下半身がみるみる再生していく。

まるでビデオを巻き戻しているかのように。

1分ほどで無くなった上半身は復元された。

「そんな！？どうして！」

「バーサーカーは12回殺さないといけないの。あと11回、アナタに出来るかしら？」

「そうね、私にとつたら口紅を塗るくらい簡単ね。でも今は・・・」

ベヨネッタは凜の体を抱きかかえた。

「ええっ！？ちよつと・・・！？」

「これ以上夜更かししたらお肌に悪いわ。それに子供は寝る時間よ」

ベヨネッタは凜を連れて夜空に舞った。

夜はまた静寂に包まれた。

CHAPTER 3 泣きっ面にムチ！（後書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969x/>

デンジャラスwitch？

2011年11月12日17時03分発行